

北満の記録(八) 収容所その四

収容所の記録

軍部の部屋は流石に厳重な警備で、廊下の入口、入口は鉄格子の二重扉になっていて、担当下士が警備している。週に一回、ここも見回り検査することになっていて、はじめは職員と二人で行ったが、一人で行くこともあった。

入口で警備の下士官に検査の内容を話し、下士官から警備士官の許可を受けて中に入る。各部屋はソックをして応答があれば中へはいり、チームの検査に来たことを告げる。中に入つての挨拶・報告はすべて日本と同じようなことをする。部屋の中には上級将校がいて壁一面に精密な世界地図が張られている。日本ではこのような部屋には特別な者以外絶対出入りできない。まして一般人で然も捕虜になった日本の兵隊を何の抵抗もなく入れる。その寛大さに感服する。

一寸不安ながら、固くなり緊張の連続だ。検査をしていると将校が近づいてきて話しかけてくる。ますます体がこわばってくる。

世界大戦も終わり緊迫感もないが、ソ連は未だアメリカを警戒している。北海道の大地図もあって、懐かしさもあった。詳しい地図で、珍しく我が町の小さな川や林道など眺めていると、彼の将校は、

「お前この地図を見て解るのか」との問いだ。

全部わかると言つて、自分の故郷や現在地、各重要地点などを指さすと吃驚しながら、たばこを奨め、色々と話しかけてくる。

学校は何年行っているかと聞くので、日本人は、皆八年以上は行つてい

るといふと、ソ連では、それだけ学校へ行つて学があれば将校だとのこと。私は一兵隊で、日本の兵隊は皆この程度以上の事は解ると説明すると、吃驚していた。

何れにしても、ソ連の機密室(司令部)まで入つていた者は五十八万の捕虜の中でも私くらいのものであろう。後に日本へ引き揚げ、舞鶴で進駐軍の取り調べにより、ソ連共産党の教育、収容所の状況、街の状況などの取り調べがあつたが、この司令部のことは一言も出さなかつた。

ソ連職人と口論し怪我をさせる事故を起こしたのもこの時期であつた。ある日、仕事で故障箇所があり、道具の不備もあつてなかなか思うように修理ができず、いらいらしながらやつていたが、職人はさっぱり手を出さず、文句ばかり言う。その日職人は何があつたのか機嫌が悪かつた。

別の道具を持ってきて欲しいといつても聞かないので、それならお前がやつてみると、持つていた道具を投げ付けてやつた。その道具がはねて職人の皮沓の足先に当たつてしまった。相手は痛がつて飛び跳ねる。こちらもお驚して沓を脱がせると、足の親指の爪が剥がれそうになり、血が吹き出る。すぐに手ぬぐいで縛る。職人が怒り出した。

「お前、俺にぶつけて怪我をさせた。このやろう……。監督に言いつけてやる」とすごい剣幕だ。

いくら謝つても遅い。こちらは捕虜の引け目があり、相手は怒つて出て行つてしまう。修理箇所をほつてもおけず、亦ひとり修理を始める。暫くして政治部員と監督を連れてくる。監督は一件の事は言わず

「修理できたか」と聞く。

「もう少しでできます」という。

職員が二人に説明し始める。状況とは全く違い、あくまで故意にぶつけた様な説明なのだ。

「ムラカワ 本当か」と聞くので、違いますと真実をこれ云々と、一人では押さえきれず、居ても手伝いもせず、押さえているから別の道具をとってきてくれといつても動かず、それならお前がやってみると道具を投げたのはねて当たったのだと、説明する。

「解った」と状況が理解されたようだった。ひとりで修理中に怪我をさせた以上処罰の事を考えたが、起きたことは仕方がない。どうにでもなれと思うと気も落ち着く。

監督は、政治部員と何やら話をしていたが、帰り際に「体したことはないから、心配するな。」と言って出て行く。残った仕事を片付けていると職人が来て、

「仕事終わったか」と言つて修理箇所を見て、

「うん、これならいい、大丈夫だ。」と先ほどとは打つて変わつて機嫌がよい。足は痛くないかと聞くと、

「大丈夫だ」とのこと。政治局員に随分叱られたとのことだった。

局員も自分の説明が正しく理解してくれたようで、怪我も不可抗力によるものとして処理してくれたようである。職人も自分が悪かったとあやまり、以後一層の信頼関係が深まる。その後、平穏な毎日が暖かくなるまで続く。昭和四十七年三月二十日でこの仕事も終わる。

鑄物工場

四月一日から十日間ほど、鑄物工場の手伝いとして派遣される。機械の部品から、簡単なものまで、色々なものが作られていた。鑄物工場は初めてでその行程は珍しかった。近くには多くの建物があつたが、ほとんど廃工場に等しく、荒れている。

工場の近くには機械や幾多の部品が山積みになっていて、作業はこの廃品の中から鑄物を選びだす仕事なのだ。機械部品を大ハンマーで破壊し鑄片をとるのだが、この仕事も大変だ。

長く派遣されてきていた仲間は先輩として鑄造の手伝いをしている。仲間間で話をしていううちに、ジユラルミンで箸が作れないかということになり、工場の責任者に話すと、監督に解らないようにやるなら良いとのこと、早速廃品の中からアルミ製品を選びだし、それを容器で溶かして造る。あまり簡単なので、今度はスプーンをつくり、次は食器と、段々にエスカレーターしていく。

初めは休憩時間だったのが、収容所の仲間のもも作る様になり、一人専門に掛かるようになる。その人の分は他の者が仕事を受け持つやり方でやっていたが、途中で材料もなくなり中止となった。この時作ったスプーンは帰国の時持ち帰った唯一つの記念品として残っている。

溶接作業

入ソして二年目の春、再び草木も緑の芽を吹き、良い季節となる。酷寒より解放された喜びは日本ではとても味わえない喜びであった。八月にわたる寒さとの戦いであった。

四月末頃より今度は溶接の方へ回される。当労働大隊には溶接技術者は二人だけだった。一人は自分より大分先輩で、関西のある造船所に勤めていて、召集で軍隊へ来たとのこと、技術の経歴も随分上だった。

先の大アパート建築工事も進み、その階段やボイラー取り付けが溶接部の仕事だ。極東地区のソ連側の工場、各事業所には溶接技術者のいないところが多く、地区に二、三人程度とのこと。しかも、技術レベルが

低く、使い物にならないと嘆いていた。そのような訳で、我々二人は引張りだこ。日本労働大隊の作業場の他、ソ連の工場まで呼び出しを受ける程になる。

そうになると、労働大隊の作業監督であるセリゲン監督の鼻が高い。他の事業所へ行くときは、助監督が付いて行く。遠くはトラックで行く。事業所から迎えが来ることもあり、必要道具はみんな積んでくれる。まるで大臣扱いだ。仕事はいつも簡単に終わる。しかし技術が問題で、重要な部分は必ず我々の手が必要となるのだ。

二十分や一時間位の仕事でも、ノルマは百%〜百二十%位書いてくれる。他へ行くと必ず、主な仕事の他に個人の仕事が多い。どこへ行っても飛び入りの溶接があり、必ずまたお礼がある。これも役得か。

街の中心部にも、かなり大きい工事現場があつたが、ここは全部基礎から日本人だけで工事が進められていた。自分もこの現場へ溶接やボイラーの組み立てに随分と通つた。大きい現場も近かつたこともあつて、掛けもち仕事だつた。

赤犬事件

或る、秋も深まつた寒い日の朝、仲間が材料置き場に赤犬が死んでいたら、休憩のときに話をした。そこでいろいろな意見が出る。

「寒くなつてからの赤犬の肉はうまいぞ、」

「病気が、毒を食べて死んだのでは、」

「昨日あそこにはなかつたから今朝死んだのでは」等々。

太ももだけなら何ともないから持つてきて炊いて食べようということに決まる。しかし、そこから誰がどうやつて持つてくるか・・・となる。

単独で街の中を歩けるのは溶接の二人だけ。ここは現場も近く仕事上単独行動が許されていた。しかし、事が事だけに、現場責任者を呼んで計画を立てる。ボイラー組み立て班の中で口止めをして行動を起こす。

道具をとりながら二人で行き持ち帰る。解体するものは、又経験のあるものも居て、そのものに任せ、湯を沸かして煮るもの、分担して手取り早く事が運ぶ。地下の入口には見張りを置き、地下室の奥で秘かにやる匂いが心配であつたが無事出来上がる。昼食には収容所の食堂から各現場へ暖かいスープが運ばれてくる。その中へ、水炊した肉を入れ全員に食べさせる。

現場の仲間は、今日は随分肉が多いなあ・・・と大喜び。うまいうまいと食べる。(知らぬが仏)知っているのは一部の者だけ。食べてしまつてから、現場のみんなが知ることとなり、食べたもの皆同罪と口止めする。しかし、これも他の現場より後日話が出て、監督兵の耳に入り、所長より委員長が呼び出される結果となる。

犯人を連れてこいとのこと。現場が分かっているだけに、委員長も困り責任者を加え二役会議で検討し、代表で自分に出てくれと頼まれる。絶対に悪いようにはしないとの事。もつてきたのは自分であり、代表として名乗り出る事を了承する。委員長と二人で所長のところへ行く。所長も自分が司令部での作業、溶接工であることは知っていた。今回の件に関し、若し毒が入つていて病人が出たりしたら大変だつた。本来なら牢に入らなければならぬとの話で、委員長が中に入り、色々説明し、本人の作業の方も考慮に入れて欲しいと懇願した。それならば委員長に処罰の方を任せる、ということ引き下がる。執行部で罪が決められる。

・一か月のたばこの配給、喫煙の禁止

・二週間夕食後片側廊下の掃除

以上の罰則であったが煙草は所内だけ我慢してくれ。現場へ行ったら吸わせるからと責任者は言ってくれる。亦、掃除の罰も普通朝昼晩が本来の罰であったが、今回は就寝前としたことは、してもしなくともよい時間なので、ソ連への報告の都合上の罰則だとのことであった。

実施の日から決められた掃除を始めると、同じ現場の者がみんな出てきて手伝う。はじめは一人二人であったが、代表で責任を負ってくれた者を黙ってみているのか、との声が出て皆手伝うようになる。一人では三十分位もかかるが、大勢でやるので五・六分で終わる。この罰も名目だけで一週間で解除される。どんな環境、境遇であろうと負けずに誠意を持って当たる事が、そこに信頼と友情を生み、亦それによつて助けられることを知ることにもなった。ソ連人だろうと、日本人だろうと信頼の中から友情が生まれてくる。

この赤犬事件があつた現場の建物は将官の入る宿で、地下一階(ボーラー室と倉庫)一・二階は部屋で二家族が入る立派な建物で、入居する将官であろう、奥さんを連れて二・三度見に来たこともある。

煙草

昭和二十二年冬。ある日監督に連れられて街から西北のはずれにある工場へ行く。機械の調子が悪いので見てほしいとのこと。

行つてみると針金や屑が足の踏み場もないほどに散らばつて雑然としている。どうやらここは、古鋼線で釘とステッフルを加工している工場の様だ。その釘を造る機械の調子が悪いとのこと。分解して調べてみると摩擦が甚だしく、部品を取替えなければ正常な製品はできないと説明すると納得。夕方迎えに来るからと言つて監督は何処かへ行く。

工場の職人といろいろ話をしている内に、煙草の話になり、近くに煙草工場があり、その工場で屑を捨てる。その中にいいものもあり、のむ煙草に不自由はしないとのこと。うまい話だ。捨て場所はここからさ程遠くないとのこと。一時間もあれば行つて帰れるとのこと。それなら俺も連れて行つてくれと頼み、出かける。

坂を少し降りたところから氷河だ。アムール河が結氷したところに一直線に道が出来ており、中ほどに黒い山がある。「あそこだ」とのこと。そこまでは五・六百米はある。対岸は満州である。

見つかつたら逃亡者として射殺される恐れがあり危険なことだ。しかし、職人が付いているので心強い。捨場につくと煙草の屑、中にはまともな葉煙草もある。袋物もあり、あけるとかなり良いものもあり、選んでいる暇もなく急いで手当たり次第袋に詰めて、職人にも持つてもらい急いで引き返す。工場へたどり着くまで、気が気でなかった。

夕方、監督が来て一緒に現場へ帰る。これからがまた大変である。一人二人で大量の荷を持ち込むのが難しいのだ。現場の人で、それぞれポケットに入れたり、袋に入れて腰にぶら下げたり、平静の恰好で收容所の門を入るのだ。

不審がられては大変。調べられ、どこから持つてきたとなり、最後は取り上げられてしまうからだ。大量に運んできたので、二度に分けて皆で運び込む。收容所の中に入れば心配もない。

その日から部屋の中は煙草の煙でかすむほどであった。一番から三番くらいまで篩分けして粉まで吸つた。この煙草は葉巻煙草の上物で結構おいしく、随分長い間吸うことができた。しかし、残念ながら、二度とこの捨場へ行く機会はなかった。こんなことが出来たのも溶接工としての技術のおかげで、あちらこちら歩けたのでいろいろな経験を得ることができ

た。

緊急作業出動

亦、或る夜ソ連側より、緊急作業出動がかかる。夜九時である。夜間なので班ごと人員を掌握して出発。

着いたところは、夜間で不明だが、貨物線で、貨車に積んである石炭下ろしなのだ。なぜこんな夜間に緊急に下ろすのか、ソ連側のやることは全く解らない。

班別に分かれて下ろすことになる。貨車が大きいので五十頓位は積んでいるのではと思われるが、真つ暗なので解らない。炭貨車で下側が開くが、石炭が落ちない。何トンもある大きいものから、小さくとも半トン位はざらで、開いた隙間からは出ない。

割るにしても大変。ハンマーの数が少ない上、ハンマーそのものが小さく歯が立たず閉口する。何やら露天掘りの炭田から来たもののようにであった。平均して小さいものが多い貨車は早く下ろし終わり、遅い方を手伝う。

明け方になって、やっと全貨車下ろし終わり帰所。次の日は休み(日曜)だったので休養できた。いずれにしてもソ連側のすることは解らないことが多すぎ、理解できないことばかり。

楽しい経験

短期間に多くの仕事を捕虜にさせようとするソ連の焦りか……。彼らとして終戦で物が不足している時なので、随分重宝がられる。

或時など常駐作業場へ行くと、助監督が「今日は他のところへ行くから」との指示だ。「道具は？」と聞くと「いらぬ」とのこと。助監督について街の中に行く。何の建物か大きい建物(日本の官庁街のような)が続く。あちこち街の中を曲がりながら歩く。一・五キロほど歩くと、「ここだ」という。

工場地帯ではなく民家やアパートが多い場所である。俺の家だと一軒家へ招き入れる。

「今日は、二人に何日も世話になったから、ゆつくり休んでもらうために呼んだので、くつろいで欲しい。」とのこと。

きれいな若い奥さんを紹介してくれ、たくさんのお馳走が出る。片言の日本語・ロシア語で会話が弾み、奥さんも加わり楽しいひと時を過ごす。

午後少し回ったところで、別の道を通り、とある工場に立ち寄る。鉄工場だった。火床もあり、誰かが何か造っていた。見ると司令部と一緒に仕事をしていた職人であった。タガネを火床で造っていたのだ。見ていると下手で見えられず、俺が造ってやると代わり、トントンと加工、その技術に

「お前何でもできるんだな」と吃驚した様子だ。

ここではばらく遊び職人と一緒に現場へ帰る。というような楽しい事もあった

コルホーズと仲間

楽しいことばかりではなく、こんな事もあった。

秋も早い九月の中頃、溶接の小道具を持ち、助監督に連れられて、ト

ラック(幌の付いた荷台)に乗せられ、他の現場へ向かう。どうやら南へ走っているようである。昼ごろやっと目的地へ着いたようである。

ここが何処か、南か北か全く解らない。只、広々とした農地であるという事だけ。三時間も走り続けていたので相当遠くまで来たことには間違いない。ここは農場(コルホーズ)の貯蔵庫とのこと。

このボイラーを修理してもらおうということであった。まずは、飯を用意してくるといつて助監督はトラックで出て行く。近くに街らしいところはなく、建物もない。ただ細長いこの建物だけである。貯蔵庫なら何か食べものはあるかもしれないと、二人で部屋の中を探るが、何一つ無く、空室ばかり。水道の水も出ない。どこで止められているのかも解らず動くも腹もへるので、持久戦の構えで暖房用の雑木を集める。

午後になり、知らないソ連人労働者が来て、これを頼まれたからと、包みを差し出す。中身は黒パンと牛乳二リットル位だった。聞くとこれは労働者の家の食糧とのこと、ここから二・三キロ離れた所に住んでいるという。わざわざ我々の為に遠い所を持ってきてくれたのである。

それにしても助監督は何処へ行ったのだろうか。他人に頼んで何も言わず行ってしまうとは・・・。

この辺りは農場で、ここから一・五キロ位の所に日本人がいるとのこと。秋の夕暮れは早い。また夕方になると急に寒くなる。今度は、夕食もななく夕方になると二人だけでは心細い。まして他国の知らぬ土地で空き家だし、薄気味悪い感じさえする。ここに居ても何にもならないし、先ほどの話の日本人の居るところへ行ってみようということになり、先に教えてもらった方向へ進む。

畑の様な中の一本道を建物のある方向を目指して進むうち、また別の労働者と会い、日本人の居るところは何処かと聞くとすぐその丸い

ドームだという。二人はやっと勇気付き、ドームへたどり着く。

あたりはもう暗い。中へはいり、我々は今日バロフスクから近くまで仕事に来たものと自己紹介する。労働大隊の事は聞いていたらしく、歓迎してくれる。中には二十五人ほどが居て、責任者らしい人が挨拶をしながら、現地の様子や仕事のことなどいろいろ話をしてくれる。

互いに厳しい労働と生活の中で、我々の訪問を受け、まるで兄弟が訪ねてきたような喜びで歓待してくれた。小部落で、その上小人数で苦しい毎日のようである。我々のように街の真ん中で生活も良くなって来た収容所とはかなりの開きがあった。

部隊の話、終戦後たどってきた苦労話など語り合う。楽しい時も瞬間に過ぎ、消灯の時間も来て、皆で今夜一晚は泊つても良いではないかと言ってくれたが、自分らはあの空き家から動くわけにはいかないと、帰ることにする。互いに帰国に日まで頑張ろうと励ましあい、別れを惜しみながら闇夜の中を帰る。

もらってきた灯りもなく、部屋の隅に二人体を付合わせ一夜まんじりともせず、不安の一夜を明かす。夜が明けてくると、すぐ火を焚き明るくなってきた安心感でウトウト眠りにつく。助監督が戻ったのは十時頃か。今度は、食料も若干持つて来てくれたので、やっと空腹を満たす。

人間らしさに戻り、さて、助監督に文句を言う。彼はただ「済まなかつた」というだけだった。さあ仕事ということになり、色々故障個所の説明を受け、二人で手分けして点検する。使用しなくなつてからしばらく放置してあつたので、とても修理の出来る状態ではない。そこで修理のできるところと部品を取替える箇所を調べ必要な器具・工具を調べ帰ることになる。それならなぜ昨日のうちに、この点検作業・検査をさせなかつた

のか。

昨日のうちに済ませれば、夜遅くなっても帰ることが出来たのである。一夜、寒さと闘い、寂しい心細い思いをしないで済んだものを。この夜の事は、二人にとって、一生忘れられない思い出として残っている。

極寒の中の作業

各地に分散して進められている工事現場の作業も順調に進む。大アパート、小官舎、上級将校の官舎から将官の部屋まで大小合わせると数え切れない数の建築である。レンガは先に我々が造っていた工場から運ばれてくる。

木工場で引割っていた板は部屋の中仕切りや天井、床に組み合わせて使用されていた。建築も進んでくると、溶接の仕事も少なくなり、スチームの配管作業が多くなり、配管仕上げ作業と兼務となる。

再び冬となり、配管の手作業も冷たく厳しい作業となる。大陸的寒気は殊の外厳しく、日中でも氷点下三十度以下のときもある。二十度くらいは暖かい方だ。三寒四温がはつきりしていて、仕事もそれなりに対処しておくのだ。また、暖かいと雪が降るのでこれまた困る。

初めての冬は、酷寒の山の中で寒さとの戦いであった。二回目の冬は司令部の中だったので比較的楽な越冬であった。

ソ連に来て、三度目の冬だ。街の中とはいえ、極東の寒さには変わりはない。三回目で幾分寒さに慣れてきたこともあり、少々の寒さにも、体が耐えられるようになってきた。

街は沢つづきにあり、丘の中腹から上に多く建ち並ぶ。道路の幅は広く、歩道も両側にある。西と北側に川があり、しばれも強く風も強い

で、体感温度は低い。日中でも氷点下二十度〜三十度くらいは普通で、四十度、五十度になることもある。凍傷にならないように注意するのが大変。

しばれる日など、外で小用をするのが大変な苦勞。風向きを避けてするのだが、風で飛散して、ズボンにつくとすぐに凍りつき、下へ落ちても流れず、そのまま積み重なってくる。こんな状況になるのはひと冬に何度もないが……

共産主義とその矛盾

労働大隊が発足してからの收容所の生活と労働運動について書いてみよう。

発足と同時にソ側の指導により、委員長を選んで收容所の統制をするので、立候補者を出し選挙するようにとのことで選挙となる。

多くの中には、学徒出身者で赤系の者も居て、立候補選挙を行い、執行部の三役が出来上がる。暫くして三役は順次、三か月のソ側共産党の教育を受けてくる。場所は不明だが、各收容所から送られてきた闘士ばかりで、かなり専門的な厳しい教育のようだった。

教育を受けて帰って来たものは皆一人前の共産党の指導者らしく振舞い、一部の反感を買う。また、中にはこれに追従するものも出て、所の中の分裂のきざしが起こる。作業が特業者(技術者)と一般の者との仕事上、ノルマの達成度が違い、職場での作業上、監督や職人の受け入れ方も異なる。一般の者の職場での不満を、追従により労働運動に対する立場を有利に運ぼうとする者が多くなる。

特業者は月の平均がノルマ百%以上になるので、その褒賞として世界

赤十字社の日本(故郷)へ、便りを出す許可を与えるなど、また、ノルマを超えた者にはノルマにより金銭(ルーブル)が与えられた。この様なことにより特業者と一般を分けるとのソ側の指示を受け、急きよ収容所の一角の敷地に新宿舎を建てそこへ特業者を入れる。

入るといつても特業者全員が入れる訳ではなく、四十名位の枠しかない。大きい作業場の責任者から始まり、自分も何とか、この宿舍の住人となる。入居してからがまた大変。大部屋の者から目の敵にされる。行動にしても、言動にしても何かにつけ気をつけなければならぬのだ。

仲間(日本人同士)でも人を見て話をしなければならぬ時代となる。執行部指導で、仕事に対する「サボ」から執行部に対する批判の厳禁。また、日本資本主義への思慕的言動や民謡・童謡を歌うことの禁止などこれらに違反した者は誰であろうと反動分子として大衆裁判にかけるという決定を出す。

すべての執行部で案を出し、決定発表されるのだ。大衆的意見の集約ではなく、大衆を無視し執行部だけの意見で共産主義を鵜呑みにした行動である。良識のあるものは反発の心を持っていても、表面には出さない。帰国の日まで真の心は奥に入れ、表面だけの共闘として行動する毎日であった。

仕事から帰ってきてからの所内での活動の方が大変だ。共産党のマルクス・レーニン主義の勉強である。食事以外は、この勉強に追われる。会議室には多くの党に関する本が持ち込まれ、共産党史を日本語に訳した本により、毎晩夜中まで執行部の指導で勉強させられる。

参加しなかったり長期さぼったりすると、反動分子の烙印を押される。その他、週一回の大衆講義のときは、全員大部屋に集まるが、ほとんど午後七、八時頃から始まり二、三時間は行われる。資本主義の分析か

ら、世界分析まで。

共産主義に対する批判めいた事は一切言わず、労働者は世界共通、労働者だけが仲間だと主張する。ここでまた問題が起こる。朝起床(六時)と同時に教育が始まる。執行部(アクチーブ)、準委員(準アクチーブ)、行動隊、一般と役職がある中で、準アクチーブと行動隊の連中がうるさい。

目を覚ますと呼び出し(アジレと言う)で大衆にアピールするのだ。これは、一つのことをいろいろな角度で、いい様に解釈して批判する。これは互いに激烈を極めたものだった。

週に一度、小討論会もあり、ただ聴くだけで発言もしないでいると批判の対象となり、他の出席者から批判・攻撃を受ける。常に党史を勉強していなければ、討論会には参加できない。弁舌の達者な者に抑えられる。

ソ側の教育に行ってきた者は、唯物論やら三段論法で論理、論説されてしまう。いつの時代も弁舌の達者なものは、有利な処がある。舌先三寸という言葉があるが、口ではどのようなことでも言うことができるが実行を伴わなければ何にもならないのだが、論説で大衆を引きつけようとする。

論説にもなるほどと理解できる処もある反面、どうしても理解できない処も多くある。真の日本人にはとても付いていけない処もあり、人それぞれの考え方が違うように、ソ連にも反対者は居たが、生活上やむなく従うといったところだ。

大衆講義や討論会は大宿舍の半分を使用し、全員集まるので、身動きできない状態の中で始められる。委員長の話が闘士らしい弁舌で始まり、なかなか終わらない。三段論法的に論説されるのでかなわん…。仕

事で疲れて帰り毎晩の寝不足でいるから、ちょっと気を緩めると眠くなる。

薄暗い部屋の中で座って聞いているだけの者に取っては無理もない。居眠りがでる。気の張っているときは、我が身をつねって眠気と戦うが、こくりこくりと始めては、隣に良き友が居る場合は注意してくれるが、これが行動隊に見つかると大変。その行動隊員は得意気にすつくと立ち、「緊急」と言つて「我々同士が今懸命に闘っている(行動・討論・集会・その他をすべて闘いという)のに、ここに居眠りをしている者がいる。」とアピールする。

そこで「ここにも居るぞ」とあちこちからアピールするものが続出し、今までの眠気も一遍に飛んでしまう。会場は騒然となり、行動隊員から「そんな反動分子はつまみだせ」ということになる。

緊急に委員が集まり、即決で大衆裁判(人民裁判)の開催が発表される。判事は副委員長が当たる。居眠りした者(反動分子)は前に正坐させられる。

執行部や行動隊の者でも、にらまれたらこの槍玉にあがる。裁判に掛けられた者は、一応意見は聞くのであるが、一言言々と、その十倍もの反論・批判が浴びせられるのである。それで反動分子は黙ってしまう。今度は、無言は我々に対する反発として受け取られ、三段論法的に攻撃され、どのような人でも、精神的ダメージを受ける。

このことで、痴呆症のようになった人もいた。最後に、意見を集約して、さまざまな罰則を適用する。居眠りだけで大衆裁判に掛けられる位くらいだから、如何に常日頃の行動・言動に対して、厳しかったかを知ることが出来る。

アピールするものは、自分を認めさせる野心家ばかりで、仲間を裏切っ

てまで行動を起す。良識にあるものは当たらず障らず、適当に行動するしかない。友を庇い、いつかまた庇ってもらおう。帰る日まで……。

ノルマと生活

労働大隊になってから、すぐ生活面から、食事まで良くなった訳ではない。発足当時は仕事に慣れないことと、冬季節に入ったため、土工をはじめ、建築も基礎工事がほとんどのため、凍結と毎日の寒波でノルマも上からず、雑作業に従事していた者は三十%位しかもらえず、手職を持つた者でも道具がなかったり、思うようなものがなかったりで、やっとノルマの五十%位。

昭和二十二年一月より個人のノルマで食事が支給される。これが共産主義のやり方で、働きの良いものには金も食料も与え、働きの悪い者はそれなりに与えるやり方である。各現場で作業をしたその実績がそのままノルマとして、現場の責任者から与えられる。

各現場のソ側責任者は、その日の出来高を午後四時頃検査する。個人と共同別で四時以降は翌日の分となる。各事業所にはノルマ計算担当者が出て、すべての作業のノルマ計算表によって割り出される。渡されるチケットは前日のノルマで、作業現場と仕事名、ノルマ%、名前が記載されている。そのチケットをもらって帰り、夕食時に各人が炊事場の窓口へそのチケットと飯碗を差し出す。その%により、食事が渡されるのである。

ノルマの達瀬度によって、食事支給の量(g)が決まっている。同じ仕事でも現場によって責任者が異なる検査をする場合もあり、責任者の考えでどうにでもなるようで、ノルマの%も随分不公平があった。

百から三十%位までまちまちで、百であれば飯碗に七、八分目位あり、五十以下だと、とても少なくて腹が満たされず、苦勞するものほど量が少ないようだ。食べる所は、寢床の上なので、ほとんど並んで食っているので、一人が多く、隣のものは三分の一ではとても一緒に並んで食べられないはず。

食堂とてない収容所の生活で、働いて食べることだけが生きがいなのにこの食生活ではうまくいくはずもなく、色々と問題が起きる。隣同士で分け合つて食べるのだが、いつも分けてもらう方はどうしても気後れしてしまう。

今まで一つ釜の飯(軍隊)を食べていた者が、これでは人間として駄目になつてしまう。日本人として食べ物による差別は耐え難いことであるので、全員のノルマの平均で全員に支給するように交渉し、理解してもらう。

二か月ほどで個人ノルマの支給もなくなり、その後日が経つにつれ、仕事にも慣れて徐々にノルマも上がるようになって、平均で五十〜七十%ほどになり、食料も安定する。しかし、食料といつても在ソ中、米は一度も支給されなかった。一番多かったのはコウリヤン、粟、芋、豆類、澱粉が穀類として支給され、あとは黒パン、スープの材料として肉、魚、野菜が支給される。

朝晩、澱粉かき、飯碗一杯二人分で一か月続いたり、豆の水炊したものが、朝晩二か月も続いたりした時は閉口した。澱粉かきのときは、野草(よもぎ、タンポポなど)を採つてきてゆでてそれに澱粉かきをかけて食べるのである。

おかげで胃を悪くしてひどい目にあつた。腹の葉は、芋を焼いて炭にし、それを粉にして常薬とする。下痢や腹痛には良く効いたものだ。汁は毎回一リットル位で中身は肉、魚、野菜は申し訳程度。他に砂糖や若干の

米など支給されると、量が少ないので、一、二週間分を貯え、炊事係が工夫していろいろと珍しい菓子(代用)を作つて支給し皆を喜ばせたりもした。これは休日の楽しみの一つともなつた。

入浴

昭和二十二年から週に一度入浴させてくれる。

街の中にある入浴場で所内から二キロ位行つたところにある。入浴は夕食後から始まる。一回に五十名くらいずつ出発する。最終は夜中になる。毎回先発は順番になるので、何時かは最終班に当る。浴場についても、裸になり入浴できるのは一四、五人で上下の服だけ自分のもので禪も下着も脱いで、大きなかごがありその中に入れ、裸で浴場に入る。禪は私物で入浴のときは替りを持つて行く。

全部シャワーで一メートル置きに仕切り壁がある。入っている時間は一〇〜一五分ほどで忙しい。湯を当てて濡らし、洗つて石鹼を洗い流すだけ。出てくると自分のサイズ(大・中・小)を係りにいふと洗濯をして消毒済みの下着上下が渡される。支度をして外へ出て待つのだ。

三十分〜一時間ほど外で待つのも大変だ。冬の寒い日などはこの待ち時間が大変で、宿舎に帰るまでにすっかり冷え込んでしまう。だが、浴場へ行かなければ洗濯消毒済みの上下下着を受け取ることが出来ないのだ。入浴の日は、宿舎と浴場の往路は日本人の行き帰りで賑わう。週間の着替えは一着分余分にあり、自分で洗濯し交互に交換をするのだ。入浴をし、消毒をしたきれいな下着が支給されるようになってから、「シラミ」はほとんどいなくなった。夏は良いが、秋から冬になり、シバレが強くなると大変だったが、このために風邪をひいたという者もあまりいな

かった。

ノルマの報償

捕虜には国際捕虜扱基準が定められているが、戦中はその国情により、都合の良いように扱われ、戦後もまた同じような扱いもあったようだが、やはり都合の良い様に解釈し、戦後の復興に利用され、その働きに対する利潤により衣食住を賄うやり方で、少しでも帰国を遅らせるソ連などは、人民の政治・労働者のための国といえども、この非人道的な扱いは、言うことと実行が伴わず、初めから最後まで騙し続けられた。

ノルマの作業出来高もすべてうまく作成されているが、労働者を縛り、労働力の向上に利用する都合の良い方法だった。このノルマが八十%で捕虜扱基準に掛かる経費であるとのこと、それ以下であれば基準以下の扱いなのである。

「働かざる者(ノルマの上がらない者)、食うべからず」主義である。その代り働きの良い者、八十%以上(月間平均)働いたものは、昭和二十二年二月より金銭が支給される。八十%以上の実績者は、初め四、五人で、所長が来て各人に百ルーブルの封筒が手渡された。これも他の者への作業意欲を引ききたてる為のものだった。百ルーブルは当時の日本円と同じくらいの単位で、二キロパン一個二ルーブルで買った。普通労働者で三百〜八百ルーブルの収入だった。この報償は三か月程で中止となる。

これも作業能率が向上し多くの者が受給するようになり、ソ側の計画・目標が達成したためであった。

また、報償として世界赤十字社の往復はがきをノルマの上位者に与え、日本への文通を許可した。初め我々も果たして敗戦国の日本まで届くか

どうか信用しなかったが、書いて出してみる。帰国まで四通出した。

往復はがきだが、一度も返信は来なかった。また、褒賞として日本向けラジオ放送で消息を放送してもらえということ、宛名・住所・氏名を放送文に書いて提出した。

これも全く当てにはならなかった。しかし、これは後日(昭和二十三年十二月)帰国してみると葉書四通は届いており、ラジオ放送も二十三年秋頃モスクワラジオ放送で放送されたとのことであった。

書いて提出した(昭和二十二年夏〜二十三年夏)時は疑っていたが、帰国して家族の者が、この手紙で生存を知り、戦後の苦労の中で大きな喜びであったことを知る。また、ラジオ放送は、あたかも本人が語りかけているような気持ちのこもったものであったとのこと。

放送文

「お父さん、お母さん、武雄は元気で働いています。近いうちに帰ります。」世界赤十字社に感謝する。

技術競技大会

昭和二十三年正月元旦には、僅かながら餅も支給され、日本の正月の味を思い出すことができた。また、この頃より色々なサークルが作られ誰もが何れかのサークルに入り活動せねばならず、休日には、色々な催しが行われた。折角の休日もゆつくり休む事も出来ず、教育とサークル活動で暇もない毎日、床に就いたときだけが、心身共に休める場所であり、時間であった。

起きてから寝るまで、油断の出来ない毎日であった。仕事にも慣れ、教育の苦しさより、仕事をしている時の方が楽であった。仕事をしながら、

故郷のこと、仕事のことなど話し、互いに励ましあっていた。

二十三年夏、極東地区ソ連労働大隊代表と、日本労働大隊代表の技術競技大会が催された。場所は、収容所のすぐ裏側で四十坪(各二戸建て)の平屋の建築の競技で、基礎は前もって作つてある。基礎から上部全部を、レンガ造りで建物を完成する競技である。

人員は各組五十人ずつ。何日も前から人選と作業計画を練る。(図面は前もって渡されている)自分もミキサの部門に入る。途中故障などが起きたら大変だ。当日は日曜日で他の者は応援である。ソ側も同じ仲間が大勢応援、一般人、家族も沢山見物に来ている。天気も良く、それぞれ人員の点呼があり、ソ側は赤、日本側は白の布をつけ闘いの準備。

朝七時花火を合図に作業開始。午後四時の終了まで、昼食は一時間とし、休憩は自由である。始まると各運搬者は走り、忙しく手が動く。日中暑くなるも汗を拭く手も忙しく動く。指揮者は全員に目を配り、作業応援箇所の指示、休憩を適宜命じ最後まで体力持続を図る。

これ程の大掛りの競技会も、ソ連では何十年振りとの事で、新聞にも大きく報道され、興味を起す大会だったので、双方ともに絶対負けられない大会だった。十二時昼食のため合図で一時的作業停止となる。

午前の部では日本が若干有利に見えた。食事も休憩の取り方も指示通り。足を休め、体の休め方も指示に従う。午後の作業開始と同時に日本側のピッチが上がる。これは初めからの作戦であった。午前の部は、下から中間までなので、左程労力を使わないで済むが、上部になるとかなりの労力が必要となる。午前の余力を午後になり發揮する。

この作戦が見事に当たり、みるみるソ側に差をつけ引き離す。結果はソ側より、一時間ほど早く完成する。検査官により、細密に検査がなされる。悪い箇所は減点法で計算される。

日本側の建築は圧倒的に良く、好評を受ける。ソ側の建築は外観でも我々の比ではなかった。競技は勝利で終わった。主催の所長挨拶で、競技の講評がされ、大優勝旗と賞金の授与が行われる。大優勝旗は暁二枚分ほどもある立派なもので、戦前極東地区各事業所の優秀団体に授与された由緒ある旗とのこと。この由緒ある旗を今競技会勝者に与えるとの事だった。賞金は一万ルーブル。

次の日は、報償休で一日保養に連れて行ってくれる。四キロほど行ったウスーリ州の川岸で、網で魚をとり、泳げるものは泳ぎ、昼食は特別食のサービスで楽しい一日を過ごす。行き帰りは全員トラックで送り迎え。先頭車には大優勝旗をなびかせて走り、大変な一日であった。

次の日からは、一番多く行く作業場への行き帰り、その旗を先頭者が持つて街の中を歩き、ソ側の目を惹いた。以後各事業所でも、日本側の技能を認め、建物完成と同時に賞金と旗を授与するようになる。旗は大優勝旗の半分くらいで、旗は全部で三本になる。極東地区の代表的旗は、全部我々労働大隊に集められた。

貨幣切下げとバザール

昭和二十二年の秋頃噂で、近くソ連政府で重大発表が有るといふのだそれがだんだん貨幣の切り替えであるという事が分かってきた。どの様な形で何日に発表になるかも解らない。我々には関係ないが、興味があつた。

噂はだんだん確信になり、紙幣だけが十分の一に価値が下がるのとこと。また、個人の持金、交換額にも限度があるようだった。ソ連に貯蓄の制度はなく、個人の保有金だけ。しかし、肝心の何日の何時か解らな

かった。また、これは紙幣だけで硬貨は在来のもが使用され、価値もそのままであるということが解る。それは我々も硬貨は誰でも持っている。というのは道路に随分落ちていた。これを拾うのだ。ソ連人は財布を持たず、バラでポケットに入れる。交通機関のない谷間を利用して出来た都市で、坂道が多く、しかも急斜面だ。この為、上り坂でトラックのスปีドが落ちるとそれに飛び乗りをするのだ。これは街のあちこちで見かける。

このときの飛び乗り、下りの時に落ちるとの事で、そのため、坂道に多く落ちていくという訳で、歩いていてそれを拾うのである。毎日の往復だから、相当の数だ。それが今回の切り替えて価値が値上がりするのだから、皆大喜び。

往復の途中に街一番のバザールがある。バザールは市場のようなもので、これも、国営のものであり広い敷地のなかにある。街のはずれや部落のよな所にもあった。売る方がいて買い手があり、また、会話によつて物々交換も出来る。品物も日用品から衣類、毛皮製品とあらゆる物が出て居る。

土曜・日曜は黒山の人で混雑する。これが今回の貨幣切り替えによつて終日混乱となる。金のある者は物を買いたさったようだ。それから数日後切り替えが発表される。二・三日すると街のあちこちに旧紙幣が只の紙切れとして落ちていた。商店はすべて国営であったが、品切れが多かつたようだ。

一般労働者の生活は極めて質素で、黒パン一食五十〜百グラムと、スープ若干(味は馬鈴薯を主体としたもの)肉や魚はパンの副食のような物の食べ方であった。魚はすべて塩漬けでこれを生で食べている。かなり塩辛いものである。

ソ連の職人に君達はどんな楽しみがあるのかと聞くと、働くのが楽しみだという。ソ連では、働けるものは皆働き、働けなくなった者は国で見られるから心配しないとの事。一生懸命働いてノルマを上げれば、報償として官費で保養地へ旅行をさせて呉れるとの事。また、今の仕事(日本側、建築指導監督)が完成したら、一か月のウクライナ地方の保養地へ行けるとのこと。

「俺達のおかげだろう」と言うのと

「そうだ」と嬉しそうだった。

働くことの喜びとはこのことのように、労働者の国として、指導方針を目のあたりにした思いがした。

帰国準備と祝宴会

昭和二十三年九月頃。監督から、お前たちは近く帰れるかもしれないとの事だった。当時自分たち二人で溶接の仕事で色々な処へ行って仕事をしていた。技術も認められており、重宝がられ、絶大の信頼を受けていたので、何でも話して呉れた。

監督は五十歳を少し出た位で、自分たちの親の様な存在で良く面倒を見て呉れ、相談にも乗ってくれた。監督という立場で上部との接触も多く、信頼できる話だ。

十月に入り、二年がかりの工事現場の建築もほとんど完成し、足場の取り外しと、外回りの材料片付けだけとなった頃、全員に帰国の話が伝わるようになり、この仕事が全部終わったら、帰るのだということ、各現場とも残り仕事の仕上げを急ぐ。十月中旬ころ帰国は真実となり、出発の命令待ちとなった。苦しい二年の年月の間、帰国を夢見て暮らした

てきた。帰国の決定と共に執行部からの指示で、最後まで手落ちのないように仕上げてくれとの事。全員嬉々として最後の仕事に励む。

十月末、ソ連の協力もあり、委員会の決定で帰国祝賀会を催す事になる。準備委員会がつくられ、ソ側の協力も受け準備が進められる。各報償金はすべて保管されていて、その三万ルーブルすべてを当日の祝宴費用にあてる。

祝宴当日、各現場は午後三時までには帰所することになっていた。ソ連側より各現場に通達されていた。当日までテーブル用として各人三十〜五十センチの板を用意するように指示があり、各現場でもこの用途を認め許可を得て持ち帰る。当日の祝宴には、ソ連側招待として、政治局員(当收容所の担当)收容所所長が迎えられた。

ソ側の好意で賞金を使い、全部食糧を買い集め用意した。よくこれだけのものが集められたものだと感じるくらい。これには、わが労働大隊が残した実績を評価し、各事業所もかなり協力をしてくれたようだった。また、特別の計らいで酒(日本酒)二合瓶一本がついた。捕虜規定では、酒類は禁止である。

何日分もの食料がテーブルに並べられている。準備委員が朝から用意したものである。日本でいう盆と正月が一緒にきたような祝宴であり、酒の力もあつて、これ以上楽しい祝宴は味わったことがない。

教育や批判の話もなく、只帰国の話一色で、一晚楽しく過ごす。暫く酒とも別れていたのと、呑めない者もいて、呑める者は相当呑んだようだ。明け方まで呑み明かした者も居た。次の日は休みではないが、所長の計らいで午前十時に作業場へ出発する。

十一月になり、身の回りの物を整理(日本へ持って帰れる物と持って行けない物)、職場の機器類の整理、引き継ぎや返還など忙しい日々を送

る。

上旬のある寒い朝、列車(貨車)でハバロフスクを出発。收容所をでる時には現場の監督や助監督、職人の人たちが見送りに来てくれた。相手の人間ながら、働く仲間として付き合ってくれ、やつと少し話を通じるようになった人達との別れは辛いものである。これも運命か……